
祭花凛々 ~ have clean hand ~

小和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

祭花凜々 have clean hand

【Nコード】

N6633C

【作者名】

小和

【あらすじ】

大学二年の咲季は憧れていた生き方とまったく違う自分の生き方が嫌になり、大学を辞めようとしていた。そんな咲季が夏休み向かったのは凜のいる祭花村であった。

前編

この夏で何もかも終わりにしようと思った。

毎日乗る電車もバスも見ただけで嫌になって、勉強している意味が分からなくなつて、

高い学費を払ってもらつてまでわたしは何を得るんだろうつて。

溜め息ばかり吐いて、自分が本当にやりたいことどころか趣味さえも見つけられなくて、

憧れてた生き方とまったく違う自分の生き方に腹が立って、嫌になつて。

ただ、それだけのこと。ただ、わたしが弱いだけのこと。

キラキラしたものを探していたかった。

わたしの心をきれいにしてくれるキラキラしたものを見つけたかった。

こんなちっぽけな手じゃ、そんなもの見つけたとしても掴めないってことぐらい分かっていたはずなのに。

「次は、祭花通り・・・祭花通り・・・」

バスの運転手の声が車内に響く。わたしは右手を伸ばしボタンを押した。

ここは小さな田舎村、母が生まれ育ったところだ。ここに来ると夏の訪れを改めて感じる。

周りは田んぼだらけ、日差しが強くセミの鳴き声が耳に響く。

日に焼けないようにあれだけ塗った日焼け止めクリームの存在が心配になったくらいだ。

「咲季、いらつしやい！」

バスのドアが開くと、そこには笑顔でおばあちゃんが立っていた。

「おばあちゃん、待ってなくてよかったのに。こんなところでずっと立ってたら倒れちゃうよ」

バスの運賃を払い、運転手に頭を下げてわたしはバスを降りた。

「大丈夫よ、おばあちゃんこう見えてもまだまだ若いんだから。」

「そんなこと言ってーおじいちゃん怒るよ。」

「そうね、天国で怒ってるわね、きつと」

そう言っただけで笑う姿は久しぶりに会うせいか、少し小さくなったようだった。

「久しぶりね、咲季が来るなんて。何かあったの？」

「えっ・・・あーうーんと・・・」

その言葉に思わず言葉が詰まる。

「あのね、おばあちゃん・・・」

「あ、そうだ！咲季の大好きなスイカを冷やしておいたの！」

「え？」

「今年のは甘いわよーお隣の泰蔵さんが持ってきてくれたのよ」

「へーそうなんだ・・・」

「あ、ごめんね、咲季。何か話してる続きだったわよね？」

「え、あーいや、わたしもなに話してるか忘れちゃった。スイカ、今年まだ食べてないから楽しみなあ。」

そう言って私は笑った。大学を辞めたい、そんなこと、言えるはずもなかった。

「はい、どうぞ。そういえば咲季はもう二年生よね。どう、大学は楽しい？」

家に着くなり、おばあちゃんは台所からコップ二つと麦茶を運んできた。

「大学は・・・うーん、まあまあかな」

「そう。来年はもう三年生だものね。早いわねー。」

「・・・あ、ちょっと荷物向こうの部屋に持っていくね」

大学の話は今はできるだけ避けていたかった。

おばあちゃんの家に来ると、いつも決まって使っている6畳ぐらいの畳の部屋にわたしは逃げ込んだ。

クーラーをつけなくても窓を開けるだけで涼しいこの部屋が大好きだった。

「凜ちゃん、元気かな・・・」

わたしにはおばあちゃん以外にどうしても会いたい人がいた。

「そうだ、咲季と同一年のお隣の凜ちゃん、相変わらず元気よ。泰蔵さんの畑仕事手伝っているみたい。」

「凜ちゃん・・・」

その名前にカバンから服を取り出していた手が止まった。

「ねえ、泰蔵さんの畑に行ったら会えるかな？」

わたしはおばあちゃんのいる部屋まで走った。

「いると思うわ。咲季が来るって言ったら喜んでたわよ。泰蔵さんもね」

「わたし、行ってくる！おばあちゃん、サンダル借りるね」

わたしは服を片付けることもせず、急いで玄関に向かった。

少し背伸びして買った、ヒールの高いサンダルはいつになっても履きにくかった。

ぺったんこな地味で安っぽいサンダルがわたしにはピッタリだった。

真っ直ぐな道路。両側には田んぼがあるだけ。

人の数よりもかかしの数の方が多い。

なすとトマトが目印の、彩りのある畑、それがあなたのいる畑だった。

「泰蔵さーん！」

草むらに隠れた小さな姿を見つけたわたしは大きな声で叫んだ。

「おー咲季ちゃん！いらっしやい！」

泰蔵さんは日に焼けた手でわたしに手を振った。

おじいちゃんがいなくなってから、泰蔵さんがおじいちゃんのような存在だった。

「スイカありがとうございました。」

「おうっ！おばあちゃんと一緒に食べな。凜ならあっちにいつぞ！」

「ありがとうございます！」

泰蔵さんの指した方向にわたしはまた走っていく。

トマト菜園の前で見つけたその姿に、わたしは思わず笑みがこぼれる。

「凜ちゃん！」

「咲季・・・？」

凜は驚いた様子で咲季を見た。

「凜ちゃん、久しぶり！」

「うわー咲季！ほんと久しぶりだねえ！あ、ちょっと待ってて。」
そう言って凜は高い石の上に乗リ「じいちゃん、休憩忘れないでねー！倒れっぞー！」と叫んだ。

その姿がなんだか可笑しくて咲季は思わず笑った。

「咲季、あっちに飲み物が冷やしてあるから一緒に飲みに行こう。」

「うんっ！」

氷水の入ったバケツの中にはお茶の入ったペットボトルが何本も冷やされていた。
凜からペットボトルを受け取った咲季は、低めの平らな石の上に座った。

「どうしたの、咲季」

咲季の座っている石よりも少し高めの石に凜は座った。

「えっ」

ペットボトルのふたを開けようとした手が止まる。

「咲季がここに来るっていうことは、なんか悩んでるってことですよ。」

そう言つて凜は容器の半分まで勢いよく茶を飲み干した。

「そう・・・なん・・・ですよ・・・」

「やっぱり。どうかした？ま、別に無理に話さなくてもいいけど」

「うん・・・あのね・・・」

「うん」

「学校、辞めようかなって」

凜は咲季の顔を少し見たあと、タオルで自分の額の汗を拭った。

「それは・・・それは難しい問題ですのお」

凜は空を見上げた。

「ですのお・・・」

咲季もそれにつられるようにして空を見上げる。

二人の間にしばらくの沈黙のときが流れた。

「あ、ね、トマトとりたい！」

「ん？」

凜は不思議そうな顔をして咲季を見た。

「トマト収穫したいよ、凜ちゃん！」

「別にいいけど・・・」

「わたしね、凜ちゃんのとこの畑のおかげで野菜だけは描くの上手だね、って教授に誉められたんだ」

「野菜・・・？」

「そう。人間描くのも風景描くのもだめだったけど、野菜だけはいつも誉められる。」

「そうなんだ、こんなちっぽけな畑も人の役に立つんですねえー」
「ですねえー」

わたしは凜ちゃんの語尾を真似することが癖だった。

凜ちゃんはそれに嫌がることはせず、いつも笑ってくれた。

「この村変わってないね」

最初はうるさく感じたセミの声が心地よいBGMのようになっていた。

「そう？結構いろいろ変わったんだけどなあ。」

「たとえば？」

「うーん、あ、夏祭りがなくなった」

「えっ、なくなっちゃったの！？」

凜の言葉に咲季は思わず声を上げて立ち上がった。

「うん、だいぶ前にね。ほら、祭花通りの店がほとんど潰れちゃったから。もう資金が出せないの」

「あのお祭りすきだったのに・・・。」

「ま、仕方ないさ。この村はどんどん人が減ってるんだし。」

「そっか・・・」

咲季は凜の顔が少し暗くなったことに気づいた。

「あのときは、ありがとね。」

「うん？」

「ほら、あのときだよ、りんご飴の。」

「え、思い出せないよー。あ、ちよつとそこのトマトとってくるね」
そう言つて凜はトマトの収穫を始めた。

わたしが初めてこの村に来たとき、ちょうど夏祭りが行われていた。人混みの中、おじいちゃんの左手をしっかりと握り、はぐれないことに必死だった。

わたあめも落書きせんべいも興味がなかったけれど、あの屋台だけは違った。

赤くてキラキラしたりんご飴を売っている屋台。

そのりんご飴が、そのときのわたしには宝石みたいに思えて欲しくて仕方がなかった。

「おじいちゃん、欲しい！あれ欲しい！」

そう言つてわたしはおじいちゃんにせがんだけれど、虫歯になるからダメだと買つてくれなかった。

わたしは神社の前の階段に座り込み、ずっと泣いていた。頑固なおじいちゃんに対する最後の抵抗だった。

そんなわたしに困り果てていたおじいちゃんに声をかけたのは泰蔵さんだった。

「咲季ちゃんはなんで泣いちゃうんか？」

「りんご飴が欲しいんだつてよう・・・虫歯になるからダメだつて言つてんのに」

「りんご飴つてなあに・・・？」

泰蔵さんの後ろに隠れていたわたしと同じ歳ぐらいの小さな女の子が顔を出す。

「んー・・・まあ、赤くてまあるいやつだな。」

その泰蔵さんの言葉を聞くなり、女の子はわたしの正面に立ちズボンのポケットから何かを取り出した。

「あげる、これ。あげる」

わたしの前に真っ直ぐ差し伸べられた小さな手には、小さな丸くて赤いものに乗っていた。

「これ・・・トマト？」

わたしが首を傾げながら彼女に聞くと、彼女は満面の笑みで頷いた。

そのときの笑顔をわたしは今でも容易に思い出すことができる。

そんな彼女はいま、わたしの目の前でトマトを両手に抱えている。

「咲季！ちよつとおいでー」

両手に抱えたトマトをすべてカゴに入れて、凜は咲季を呼んだ。

「なあにー」

わたしは急いでその元へ駆け寄る。

「へへ、握手しよう」

咲季の正面にあのときのように凜の手が真っ直ぐ差し出される。

「握手・・・なんで？」

「いいの、ほら！」

そう言いながら凜は左手で咲季の右腕を掴み、右手で力強く咲季の手を握った。

その瞬間、何か嫌な音がした。

「凜ちゃん、いまなんかブチッって言ったよ！」

「へへー腐ったプチトマトがあったもので」

「ひどい、ひどいよー」

「咲季！」

「なに？」

「がんばれ、咲季！」

そう言って凜は少し微笑むと、蛇口につながれたホースを指し走っていった。

「あ、ちょっと待ってよー！」

わたしの手のひらには赤と緑の液体が流れていて、甘酸っぱい匂いがした。

わたしが憧れたのは、あなたのような人を勇気づける手。
キラキラしたりんご飴よりもきれいな手。

「ありがとう、凜ちゃん」

彼女の後ろ姿にそう呟いて、わたしは彼女の後を追いかけた。

後編

「明日、もう帰っちゃうのよね」

わたしが夕飯を食べている姿をぼーっと見ながら、おばあちゃんは
呟いた。

おばあちゃんが孫としばし離れるときの寂しい気持ちは自分に孫が
できてからしか分らないものだと思う。

「うん、だけどまたすぐ来るよ。」

「ほんとに？いつでもいらっしやいね」

その言葉にわたしは大きく頷いた。

村に来てからあつという間に一週間が過ぎた。

学校に通っているときは、一日でさえ長く感じるのに
どうしてこの村で一週間はこんなにも短く感じるのだろう。

この村に来てから、わたしはほとんど毎日凜ちゃんと一緒にいた。

畑を眺めては頭の中で何枚もの野菜をスケッチした。

わたしが絵の具でどんなに上手な赤を作っても、トマトの自然な赤
に敵うことはない。

「さつき、凜ちゃんが来るって言ってたでしょ？スイカ用意しておいたから一緒に食べなさいね」

「うん、ありがとう。」

今日、わたしは凜ちゃんを家に招待していた。

呼んだ理由は別れのあいさつ・・・みたいなところだろうか。

約束の時間は夜7時。凜ちゃんは決まって約束の時間の5分前に「こんばんはー」と玄関で叫ぶ。

「あ、そろそろじゃない？」

何か勘付いたように、お盆に食器を乗せながらおばあちゃんが呟いた。

「ほんとだ！もうこんな時間だったんだ、急いで片付けないと・・・」

「

「こんばんはー！」

玄関から聞こえた声にわたしとおばあちゃんは思わず顔を見合わせ、笑った。

「はい！」

わたしは玄関に向かって廊下にキシキシとした音を立たせながら走った。

「いやーこの家に入るのって久しぶりだなあ」

凜は辺りをキョロキョロと見渡しながら、咲季の部屋の床に座った。窓からは心地いい風が絶え間なく吹いている。

「クーラー入れてないのに寒いくらいだね」

「うん。まーこの村じゃクーラー使ってる家なんてめったにないからね」

「明日からまたクーラー生活か・・・」

咲季は寂しげに呟いた。

「都会の生活もいろいろと大変なんですよ」

「ですよ・・・あ、これスイカ！食べて！」

咲季の持つているお盆にはいくつものスイカが並べられている。

「ありがとう！しかしまあ、よくスイカ食べますね、咲季さん。」

「うーん・・・こっち来てから丸ごと一個分ぐらいは絶対食べてるかも・・・」

そう言いながら笑う咲季に凜もつられて笑った。

「あ、塩持って来るの忘れちゃった。ちょっと取ってくるね」
そう言って咲季は立ち上がった。

「咲季、わたしがもし花火だったら何色だと思う？」
「えっ・・・」

突然の質問に咲季の動きが止まる。

「何色って言われましても・・・」

凜の顔が至って真面目だったので、咲季はおとなしく床に座り答えを考えることにした。

凜はわくわくした瞳で真剣に考える咲季を見つめている。

「んーと・・・キラキラしてる赤、かな・・・」

しばらくの沈黙のあと、咲季は声を出した。

「ほー赤ですか！しかもキラキラしてるのかぁ」

凜が夜空を見上げながら少し嬉しそうに笑った。

「うーん、やっぱり凜ちゃんはトマトのイメージだから。あとはキラキラしてるんだよ、凜ちゃんは」

その言葉を聞いた凜は後ろを振り返り咲季に微笑んだ。

「だけど、急にそんな質問どうしたの？」

塩のことを忘れ、凜の質問を不思議に思いながら咲季はスイカを手にとった。

凜も続けてスイカを手にする。

「あたし、咲季は夜空の黒だと思う！」

「えっ？」

その凜の言葉に咲季はさつきまでよりも大きな声を発した。

「うん、咲季は黒だな。夜空の黒色！」

「え、だけど花火の色なのに夜空の黒って・・・」

「もう咲季ってば！黒だって花火の一員でしょ？ 空の色が黒じゃなきゃ花火なんて出来ないんだから」

「それはそうだけど・・・」

咲季は首を傾げたあと、スイカを一口かじった。

凜は再び空を見上げている。咲季にはその姿がまるで花火を見ているかのような姿に思えた。

「赤も黄色も、青も紫もみんな黒がいるから輝いてる。あたし、咲季はそういう子だと思うんだ」

「えっ・・・」

「咲季があたしのことをキラキラしてる赤だって言ってくれたでしょ、あれは咲季がいたからだよ」

咲季はスイカを口元から下げ、凜の話を真剣に聞いた。

「花火の赤や青は最初からキラキラ輝ける能力なんて持ってない。だけど黒がいるから輝けるの」

「凜ちゃん・・・」

「言つの二回目だけど、あたし咲季はそういう子だと思う。人をキラキラさせる力があるんだよ。」

咲季は頭の中でいろんな言葉を思い浮かべたが、凜に返す言葉が見つからなかった。

「うん、なんか自分でも訳わかんなくなってきたから、この話はここでおしまいね。」

空気を打破するような元気な声で凜はそう言ったあと、すぐにスイカにかぶりついた。

咲季はそんな凜の後ろ姿をずっと眺めていた。

「凜ちゃん、わたしもう一回頑張ってみるね・・・」

そう呟いたわたしの目からは涙があふれていて、両手で大事に持っていたスイカに零れ落ちた。

その味はしょっぱくて、塩なんていらなくらいだった。

「おばあちゃん、一週間お世話になりました」
大きなカバンを両手に持ち、わたしはお辞儀をした。

「ほんとに送っていかなくて大丈夫？」

「へーき平気！今日は暑いから倒れちゃうかも知れないし。それにバス停で凜ちゃんが送ってくれるからさ」

「そうね、じゃあ、家でおとなしくしてるわ。またいらっしやいね！」

その言葉に咲季は「うん！」と首を大きく縦に振り微笑んだ。

バス停に向かう足取りが行きよりも軽くなっているような気がした。それと同時に心まで軽くなったような、そんな気さえた。

「咲季ー！」

バス停の前には首にタオルを巻いた凜の姿があった。

「ごめんー咲季。荷物あるだろうし家まで迎えに行こうと思ったんだけど、どうしても畑行かなくちゃで。」

「うっん、大丈夫！今回は荷物少なめにしてきたから」

そう言いながら咲季はバス停にある使い古されたベンチに荷物を置いた。

相変わらず今日もまたセミの鳴き声がうるさい。

太陽が眩しいというより、空が眩しいという表現の方が近い気がする。

道路はあるけど、車なんてほとんど通りはしない。

そんなこの村の人には普通の景色が、わたしにはすべて普通じゃない景色だった。

「いやー暑いなー珍しく風が吹いてないねー今日」

凜はタオルで汗を拭った。

「畑仕事の最中に倒れないように気をつけてね、泰蔵さんも」

心配そうに咲季が呟く。

「おうつ、気をつけますぜ！」

凜は右手でOKサインを作った。

「もうすぐバスが・・・あ、来たきた！」

その凜の言葉に咲季は慌ててカバンから一枚の葉書を取り出した。

「凜ちゃん、ほんとありがとう。これ、つまらないものだけど・・・」

「
咲季は徹夜して描いたトマトの絵を凜に渡した。」

「ありがとう、咲季はやっぱ野菜描くのが上手だね」
そう言つて凜はニコリと笑った。

咲季と凜の前に乗客のいない小さなバスが止まる。
荷物を再び手にした咲季はバスのステップを一段登ったあと、後ろを振り返った。

「凜ちゃん、ほんとに・・・」

「咲季、握手しよう」

「えっ・・・」

「握手、ほら」

咲季の前に真っ直ぐに凜の手が差し伸べられる。

「うんっ！」

咲季は勢いよく右手を出した。

「頑張れ、咲季！」

「ありがとう、凜ちゃん」

凜はニコリと笑ったあと、手を離した。

バスが出発を告げる。

咲季は凜が見えなくなるまで一番後ろの席から手を振った。

本当は分かった。

何もかも終わりにできるはずなんてないってこと。

わたしが憧れたのは、あなたのようなきれいな手。
透き通った、優しくて温かい手。

わたしが大好きなあなたの手。

「キラキラしたもの、掴めたんだ・・・」

凜の手の感触が残る手の平を眺めながら咲季は呟いた。

いつか、あなたの手を支える人になりたい。

いつか、自信を持ってあなたをキラキラ輝かせることのできる人になりたい。

だから、それまでわたしはずっと描くんだ。

この祭花村の景色と、あなたの凜とした姿を思い出しながら。

祭花凛々。

後編（後書き）

最後まで読んで下さった皆さん、本当にありがとうございました。
相変わらず表現の仕方に幅がないなーと書いていて自己嫌悪になり
つつも無事完成しました。

このあと私の中では咲季の描いた作品が祭花村の観光ポスターに選
ばれる、と勝手に話を作っています。

岩井俊二さんの「花とアリス」という作品を見てから、

女の子二人の主役の話がいつか書きたいと思っていたので書いてよ
かったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6633c/>

祭花凜々 ~ have clean hand ~

2010年12月30日23時00分発行